修羅の群れ

下《首領篇》

大下英治

徳間文庫

修羅の群れ 下

《首領篇》

© 1986 Eiji Ôshita Printed in Japan

449-4

1986年1月15日　初刷

著者　大下英治

発行者　荒井修

東京都港区新橋四―一〇　〒一〇五

発行所　株式会社徳間書店

電話(〇三)四三三・六二三一(大代)

振替　東京四―四四三九二番

印刷　凸版印刷株式会社

製本

〈編集担当　磯谷　勵〉

ISBN4-19-598006-2 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

徳間文庫

修羅の群れ 下

《首領(ドン)篇》

大下英治

目次

第1章　右翼児玉富士男邸乗り込み　5
第2章　大幹部井沢輝一〝破門〟　59
第3章　兄貴横山新二郎の死　152
第4章　稲原会誕生　209
第5章　山賀組三代目葬儀委員長　269
解説　鈴木則文　359

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

第1章　右翼児玉富士男邸乗り込み

1

住井一家総長の阿倍信作は、稲原龍二を眼を細めるようにして見た。八歳年下の稲原龍二がかわいくてたまらないという眼であった。

「稲原、どうしても銀座へ事務所を出すのか」

昭和三十四年一月下旬の冷えこむ日の夜であった。阿倍信作は、稲原龍二を赤坂の料亭に呼んでいた。

稲原龍二は、阿倍信作に答えた。

「ええ」

稲原組は、稲原龍二の好きな浪曲を中心にこれまでいくつかの興行を打ってきた。関東の広沢虎造、玉川勝太郎、松平国十郎はもちろん、関東で興行を打つ機会の少ない関西の浪曲師た

ちもかわいがってきた。日吉川秋水、松浦四郎、梅中軒鶯堂、京山幸枝などを呼び、日大講堂で「関東関西浪曲大会」を開いたりしていた。

昭和二十九年、美丘ひばりが十七歳のとき、江理チエミ、雪山いづみの〝三人娘〟の興行を千駄ケ谷の体育館でおこなったこともあった。

稲原龍二が銀座に事務所を持つ一番の理由は、興行の仕事のための連絡事務所に必要なためであった。しかし、東京の親分たちにとってみれば、横浜から立ち、いまや東海道をほぼ手中におさめた稲原龍二が、いよいよ東京に進出してきた、としか思えまい。

龍二も、東京の親分たちの抵抗ははじめから予測していた。

阿倍信作は、稲原龍二にもしものことがあっては……と心配していたのである。

阿倍信作と、稲原龍二との間には、深いつながりがあった。

阿倍信作は、昭和二十三年の秋に、住井一家二代目倉元誠吉の隠退後、住井一家を継いでいた。

跡目相続披露は、湯河原の「清光園」で全国の親分衆を集めておこなわれた。

立会人には、龍二が関山組の木村忠夫の片腕を折ったことがもとで当時龍二のいた堀井一家と関山組とが全面戦争の危機を迎えたとき、仲介に入り、話がこじれたことから指まで詰めた、蒲田を本拠とする高原組組長の高原康吉、龍二が熱海の山崎屋一家の跡目を継いだときに立会人になってくれた海運界のボス楠原三之助、横浜四親分の一人藤森幸一郎ら、錚々たる人物が

名を連ねていた。

世話人は、「銀座のライオン」と呼ばれていた篠山光之介と、稲原龍二の親分の鶴岡政二郎であった。

阿倍信作は、鶴岡政二郎の舎弟分でもあった。

住井一家は、昭和三十三年に、住井系の博徒を糾合して、湊会を結成していた。阿倍直系の高山朝太郎系の青山富一郎が会長におさまっていた。阿倍信作は、住井一家総長として関東にいっそうの睨みをきかせていた。

稲原龍二は、阿倍信作から個人的にも世話になったことがある。

龍二が山崎屋一家を継いで間もなくのことであった。横浜ホテルに関東関西の客を集め、手本ビキの博打を開帳した。客は三十人近く集まっていた。

ところが、龍二の手もとに回銭が足りなかった。

龍二は、急遽、三百万円を借りに、鶴岡親分の会社である芝浦の東洋荷役に出かけた。夏の暑いさかりであった。

鶴岡親分は、半袖シャツにニッカズボン姿で、社長室の椅子に座っていた。

鶴岡親分は、はいていた地下たびを龍二に見せて言った。

「稲原、三百万円と気安くいうけどな、おれは、ほれ見ろ、こうやって仕事をしてるんだ。三百万円という金は大金だぞ」

龍二も粘った。すでに博打の客は来ている。
そこに、小さな鞄を提げた、角刈りの阿倍信作が上布の着物をきて顔を出した。
阿倍信作は、龍二の姿を見て訊いた。
「稲原、どうしたんだ」
龍二は、阿倍信作に事情を打ち明けた。
阿倍信作が、すぐに鶴岡親分に言った。
「今日、商売だっていうから、兄貴、貸してやってくれ……」
阿倍信作は、渋る鶴岡親分にさらに言った。
「おれの無尽を抵当にするから、貸してやってくれ」
龍二は、阿倍信作の頼みでようやく恥をかかないで賭場を開くことができた。
龍二は、その後も、阿倍信作には、なにかと世話になっていた。
阿倍信作は、白髪の混じりはじめた眉を寄せるようにして、稲原龍二に言った。
「稲原、おまえ、東京に出てくると、騒動が起きるぞ……」
稲原龍二が言った。
「おじさん、心配してもらってどうもすみません。あそこは、興行の連絡事務所ですから、心配しないでください」

稲原龍二は、新しくかまえた東京事務所の部屋の中を感慨深そうに見まわした。

東京事務所は、銀座七丁目電通通りの裏通りにある南欧ビルの四階であった。二十坪ぐらいのひと部屋であった。入口には、「稲原興業」という看板をかかげていた。龍二が阿倍信作に赤坂の料亭に呼ばれた一週間後の二月初旬のことであった。

龍二には、事務所の大小は問題ではなかった。

龍二が「仙ちゃん」と呼んでいる鈴木仙一郎も、心からうれしそうに部屋の中を何度も見回していた。

「この事務所を開くのに、仙ちゃんには、苦労をかけたな……」

鈴木仙一郎は、龍二と同じ大正三年生まれ、四十五歳であった。もともとは、蠣殻町の出身で、「蠣殻町の仙ちゃん」で関東に名が知れ渡っていた。

はじめのころは、どの親分にも属さない一匹狼的な博打うちであった。鈴本伊之助という親分と、折半でテラをとる、いわゆるノリで湯河原で賭場を何度か開いていた。若い衆もたくさん持っていた。

テキヤの姉ケ里一家の元総長覚野英一、青葉会の上曼一家総長酒野一郎、稲原会の元幹部の富川三佐雄や現稲原会副理事長八木岡一家総長大沢金吾など錚々たる男たちが、かつては鈴木仙一郎の舎弟であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

鈴木仙一郎は、湯河原で賭場を開くうちに、稲原龍二の賭場にたくさんの客を連れてきた。いつのまにか、客分として、龍二の賭場を手伝うようになった。

昭和二十八年ごろ、鈴木仙一郎は稲原龍二の男に惚れこみ、進んで稲原の若い衆となった。若い衆といっても、同年輩であり、実質的には、龍二の身近な相談役的な存在であった。

背は、若くしてはてたモロッコの辰以上に低く、五尺足らずであった。が、筋の通った、まがったことの大嫌いな男としてその名が通っていた。

稲原組の大幹部である小田原の井沢輝一に対し「キーちゃん」と気安く呼びあえるただ一人の男であった。井沢も、「仙ちゃん」と呼び、鈴木仙一郎を立てていた。

鈴木仙一郎の舎弟の富川三佐雄は、日本橋に富川興業を設立し、中央区人形町の水天宮一帯に勢力を築いていた。それも、東京進出への大きな足がかりとなっていた。

鈴木仙一郎は、のちに稲原会の相談役となり、昭和五十五年に病死するが、稲原龍二がその後東京で勢力をのばしていくのに、大きな役割となっていく。

銀座に事務所を持って十日ばかりすぎたころ、一人の男が事務所に入ってきた。当時、総会屋として一方の旗頭であり、稲原龍二と交際のあった吉川明であった。

外は粉雪が降っていて、吉川の髪の毛に小さな雪が付着していた。

吉川が、声を低くして言った。

「親分、佐豪谷嘉秋が、親分のことをいろいろと言っているそうですよ」

稲原龍二の表情が、にわかに険しくなった。

「佐豪谷が、『稲原を、東京から熱海へ追い返してやる！』とふれまわっているそうです」

稲原龍二の太い眉が、ぴくりと動いた。恐ろしいほど鋭い眼になった。

〈佐豪谷が……〉

どこからか妨害の入ってくることは予測していたが、まさか右翼の佐豪谷から矢が飛んでくるとは思ってもいなかった。

佐豪谷は、明治四十一年中国東北部に生まれ、若いころ、いわゆる「満州浪人」をしていた。そこで、大陸進出政策の遂行と共産主義排撃を主唱していた愛国社の盟主岩田愛之助を知る。

その後、佐豪谷は、中国東北部からインド・シンガポールへと流転していく。

のちに日本に帰り、登戸にいた岩田愛之助を訪ね、愛国社の社員となった。

佐豪谷の名が世間に知れ渡ったのは、昭和五年十一月十四日、二十三歳のとき、東京駅で浜口雄幸首相を狙撃（そげき）、いわゆる昭和維新のきっかけをつくったことによる。

佐豪谷は、この事件のため、死刑の判決を受けた。

が、昭和八年皇太子誕生の恩赦により、無期懲役に減刑となる。

昭和十五年に仮出獄し、昭和二十九年の四月には、血盟団事件の首謀者井上日召らと、守国団を結成。団長を経て、このころは顧問になっていた。

なお、この当時には、右翼の主要四十団体を中心に百二十数団体を糾合し、「全日本愛国者

団体協議会」を結成しようと動いていた。昭和三十五年に日米安全保障条約の改定があり、それをめぐる左翼勢力との激突にそなえていたのであった。

吉川の話を黙って聞いていた森田新吾が、稲原親分に言った。

「親分、佐豪谷の体をさらってきます」

稲原龍二も、佐豪谷嘉秋が本当にそのようなことを言っているのかどうか、本人の口からたしかめておく必要があった。この世界、絵図を書き、あらぬデマを流して激突させ、背後でにんまりと笑っている輩も多かった。

森田は、さっそく部屋から出て行こうとした。こうと決めたら、行動の素早い男であった。

稲原龍二が、森田の背に声をかけた。

「おい、長谷川に声をかけるのは止めておけよ」

長谷川政治は、昭和二十五年に、熱海の「富士見ホテル」事件で森田とともに長い懲役に行っていた。一度は、無期懲役の宣告まで受けていた。講和条約の特典などがあり、早く出所できたものの、まだ出所してまもない時であった。もし佐豪谷を連れに行ってまちがいをおこすと、再び長い懲役に行かせることになる。親分の情として、しのびなかった。

森田が、ふり返って言った。

「親分、わかっております」

森田には、親分が長谷川の兄弟のことをそのようにまで気づかってくれることが、自分のこ

とのようにうれしかった。

森田新吾は、佐豪谷嘉秋を見つけ出すために、弟分を集め、三組に分けた。

一組は、佐豪谷が当時岩田愛之助の娘といっしょに住んでいた芝白金台の佐豪谷邸に張りこませた。

一組は、情報が入りしだいすぐ動けるよう待機させておいた。

いま一組は、その日佐豪谷が街頭演説にまわりそうな場所を捜し歩くことにした。

森田は、最も確率の高い演説場所を探し出す組を率いることにした。

森田は、四人の弟分を引き連れ、銀座周辺を探しまわった。

有楽町では、日本愛国党の赤尾敏が、共産党をののしっていた。

そのうち、森田らの耳に、

「佐豪谷が、いま新橋駅烏森口の広場で演説している」

という情報が入った。

森田は、有楽町駅前から車を走らせ、新橋駅に向かった。どんよりと曇った、不吉な感じの雲の垂れこめた日の午後であった。

昭和二十七年四月、サンフランシスコ講和条約とともに発効した日米安全保障条約に対し、その後の日本の国内では、相反する二つの立場からの批判が提起されていた。

ひとつは、鳩山内閣の登場以来、自民党主流によって主張されたものであった。
条件の必要性を認めつつも、この反平等性を批判し、日本の立場をより強くするよう改定すべき、との主張であった。その主張の背景には、自衛隊の増強と、高度成長への道を突っ走りはじめた経済力の充実があった。
三十二年二月に成立した岸信介内閣は、安保条約の改定を、外交の基本政策にかかげていた。
いっぽう、社会党や共産党などの革新勢力は、安保条約廃棄を求めていた。東西間の軍事的中立を指向していた。
安保改定の年である昭和三十五年に向け、右翼、左翼の動きが活発化していた。
新橋駅烏森口へ着くと、森田は、一人を運転席に残し、三人を引き連れて車を降りた。冷え冷えとした風が、下からはい上がってきた。
広場の中央に、日の丸の旗をかかげた右翼の宣伝カーが止められていた。
その上で、佐豪谷嘉秋が熱っぽい調子でまくしたてていた。坊主頭の、鋭い眼をした男であった。
「みなさん！　このまま共産党をのさばらせておくと、日本はソ連に占領されることになります」
森田は、三人を引き連れ、宣伝カーの真下に行った。森田をはじめ、四人ともジャンパーの懐には拳銃(けんじゅう)をしのばせていた。

佐豪谷は、なお熱っぽくまくしたてていた。演説の途中で、引きずりおろすわけにはいかない。

森田は、佐豪谷を睨むように見上げて言った。

「稲原組の者だ。話がある。あとでつきあってもらいたい」

佐豪谷は、森田らを見下ろした。森田らの殺気立った雰囲気からして、どういう用できているかは察したらしい。

しかし、それまでと変わらず熱っぽい調子で演説をつづけた。

「ソ連、中国を、甘く見てはいけません。われわれは、もっと本気で国防について考えなくてはなりません」

佐豪谷は、それから五分ばかりして演説を終えると、宣伝カーからゆっくりと降りてきた。落ち着きはらった態度であった。

宣伝カーから降りるや、森田をジロリと見た。若かりしころ浜口首相を暗殺しただけのことはある、鋭い射るような視線であった。

森田は、佐豪谷に厳しい口調で言った。

「車に乗れ」

佐豪谷は、顔色ひとつ変えず答えた。

「わかった」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong